

# 育児不安を抱える母親支援 — 虐待行為に至った母親の面接からの考察 —

Supporting Mothers with the Anxiety of Child - Rearing  
～ from the interview of the mothers who fall into the abuse ～

寺井弘実  
Hiromi Terai

## 〈要旨〉

「児童虐待が増加している」との報道が最近は多く目につく。厚生労働省は平成19年の「児童相談所における児童虐待相談の対応件数-40639件」<sup>5)</sup>との報告書を出している。ちなみに、5年前の平成13年度は23274件であり、数字上は約17000件の増加である。

臨床心理士として、様々な相談の場所で「育児不安を抱えて脅えに近い気持ち」を訴える母親の「こころの声」を聴いていると、このような数字報道が、むしろ「育児をする母親を追いこみ」、また、「周囲が育児する母親の心理に寄り添うことを避け」、結果として「子育て支援のマイナス」になっているようにさえ思う。妊娠し、わが子の誕生を心待ちしていた母親たちが、出産後に「虐待行為」に陥ってしまった気持ちを聴いていくと、そこには「わが子ゆえに湧き上がる複雑な気持ち」が語られる。育児をする母親の力になる「子育て支援」は何か?を「母親面接」から考察する。

## 〈キーワード〉

子育て支援, 母親の心理, 心理面接, 育児不安, 虐待

## 1 はじめに

厚生労働省は平成20年9月に「平成19年度社会福祉行政業務報告結果の概況」<sup>5)</sup>を報告した。そのなかで、平成19年度中に全国の児童相談所における児童虐待相談の対応件数-40639件で、前年度に比べて3316件(前年度比8.9%)増加。相談種別は「身体的虐待」が最も多く、次いで「保護の怠慢・拒否(ネグレクト)」。また、虐待者別にみると「実母」が62.4%と最も多く、次いで「実父」22.6%。被虐待者の年齢別にみると「小学生」38.1%「3歳～学齢前」23.9%「0～3歳未満」18.2%と公表した。

平成20年6月18付けの朝日新聞の社会面には「児童虐待4万件超す 死亡、4年間で295人」の見出しで上記の速報値での記事が載り、「舛添厚労相は全国の児童相談所らを集めた会議で、“保護者との関係で介入を躊躇すると、救える命も救えない。必要な立ち入り調査は断固やるべきだ”と訴えた」との内容記事がでている。

臨床心理士として母親からの「子育て相談」を受けていると、「虐待が増加」「虐待者の6割は母親」という報道のされかたとは逆に、「もしかしたら自分が子どもにしている行為は虐待なのか?」「叱ることは回りの人から虐待していると思われていないか?」「子どものこころに傷を与えない

ためにはどうしたらよいか?」などの気持ちを抱えながら、真剣に子育てをする母親に多く出会う。しかしながら、このような母親の一生懸命さ・真剣さが逆に「精神的安定感を持って子育てができない」状態に陥ってしまい育児不安を引き起こしているように思う。

いま一度、センセーショナルな虐待報道の数字に踊らされることなく、「子育てに悩みながら、結果的に虐待行為に至った母親が語ることば」を丁寧に聴くことで、「母親の気持ちに沿った現代社会での子育て支援」の方向性を探ることができると考える。

## 2 子育て中の親子の現状

### 2-1 「兵庫レポート」からみえる母親の心理変化

妊娠し、約40週という長い時間を自分の胎内で育てて出産する母親が、こどもの成長と共に「わが子に対する気持ち」が変化していくことを示している調査結果がある。原田正文著「子育て変貌と次世代育成支援～兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防」(2006)<sup>4)</sup>のなかで紹介されている「兵庫レポート」である。調査対象地域は兵庫県西部のH市(人口48万人)と大阪府北部のI市(人口26万人)。調査は両市で実施される乳幼児健診の機会を利用して、2003年から2004年にかけて実施された。

母親の我が子に対する気持ちの変化を質問項目から抜粋する。

〈お子さん（赤ちゃん）をかわいと思いますか〉

【4か月健診】= はい：99.0%

いいえ・どちらともいえない：0.8%

【3歳児健診】= はい：96.9%

いいえ・どちらともいえない：1.7%

〈お子さん（赤ちゃん）と一緒にいると楽しいですか〉

【4か月健診】= はい：95.0%

いいえ・どちらともいえない：4.7%

【3歳児健診】= はい：89.3%

いいえ・どちらともいえない：9.3%

〈育児に自信がもてない、と感じることがありますか〉

【4か月健診】= よくある・ときどきある：49.1%

ない：50.3%

【3歳児健診】= よくある・ときどきある：64.4%

ない：33.9%

〈子育てを大変と感じますか〉

【4か月健診】= はい・どちらともいえない：85.3%

いいえ：14.3%

【3歳児健診】= はい・どちらともいえない：90.8%

いいえ：7.4%

この結果は、現代の母親は、誕生から3歳までの期間「わが子が可愛く一緒にいると楽しい」という気持ちをもっている反面、「子育てに自信がなく大変である」という不安の気持ちを抱きながら毎日の子育てをしている現状がみえてくる。しかも、「わが子が可愛く一緒にいると楽しい」という誕生時からの気持ちが、子どもの年齢が大きくなるにつれて徐々に減少してきている。この気持ちの変化が

〈叱るとき頭や顔などをたたいてしまう〉

【4か月健診】= ない：92.8%

よくある・ときどきある：6.1%

【3歳児健診】= ない：38.0%

よくある・ときどきある：60.1%

という結果で示されている。生後4ヶ月のわが子を「叱るときに叩く」母親の割合が6.1%いることも驚きであるが、三歳児のわが子を「叱るとき頭や顔をたたいてしまう」母親の割合が6割に及ぶのは大きな問題である。この多さは、育児の負担感・不安感とも関係しているといえる。日常的長い時間をわが子と日常的に生活する母親の複雑な心理がうかがい知れる調査結果である。

## 2-2 現代の母親の就業意識と就業実態

現代の女性の「就業意識」と「就業実態」はどのようなになっているのか。

平成19年度男女共同参画社会に関する世論調査(内閣府)<sup>6)</sup>で、「一般的に女性が職業をもつことについて、どう考えるか」の問いに対して、女性（該当者数：年齢20歳以上の1706人）の45.5%が「子どもができてみずと職業を続ける方がよい」と回答しており、「子どもができたなら職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつ方がよい」33.8%を上回っている。

また、総務省統計局「労働力調査」(平成19年度)<sup>7)</sup>では女性労働の状況の変化に注目して、「女性の配偶関係別労働力率」をだしているが、有配偶者のうち25歳～29歳：50.7%・30歳～34歳：49.7%・35歳～39歳：55.8%であり、とくに25歳～34歳の上昇がこの10年間大きいと公表している。

現代の女性の半数近くが「子どもができて働いたほうがよい」という意識をもち、25歳～39歳の子育てをする年齢層では「実際に結婚しても働いている数」は半数程度にも及んでいる。

女性の意識のなかには、「結婚したから」「子どもができたから」という理由で仕事を辞めるといった意識は時代とともに年々薄くなってきている。

しかしながら、「仕事と家事・育児の両立」ということは、本人の性格・能力・仕事の内容や環境等様々な要因が絡んではいるが、日常生活では女性に精神的・身体的にかなりの負担がかかるのも事実であり、その両立は容易ではない。

平成19年度男女共同参画社会に関する世論調査(内閣府)<sup>6)</sup>で、「家庭における家事について主にだれが分担しているか」の問いに対して、「妻」と答えた割合が、「掃除」：75.6% 「食事のしたく」：85.2% 「食事の後かたづけ、食器洗い」：74.7% となっており、女性の家事負担の大きさを裏づけている。

## 2-3 子育てにおける父親の役割と意識

子どものこころ成長には「母性」とともに「父性」が重要な役割をもつことは周知のとおりである。母親と父親の役割は自動車の両輪のようなものである。

子どもの年齢とともに「父親の役割」は異なる。

0歳～1歳までは、子どもにとり「包み込む母性」が重要であるが、この「母性」で関わる母親は24時間拘束されることで疲労感を抱く。この時期こそ、子どもにとってのもう一方の親である父親は、精神的に疲労する母親を支援する重要な役割がある。

家庭で乳幼児を育てている母親グループに参加すると、夫の「毎日御苦労さんだね」「お疲れさん」というねぎらいの言葉で疲れが取れるという母親の発言を聞くことが多い。夫の存在のありかたは母親の精神的安定と深く関係するのである。

「乳幼児の父親についての調査」を（株）ベネッセコーポレーションが2008年8月に実施している。<sup>8)</sup>

対象・方法：は首都圏の0歳～6歳4カ月の乳幼児をもつ父親2958名 インターネットによる調査

【あなたとお子さんとの関係についてお伺いします】

《自分は子どもの相手をよくしている》

「とてもそう思う」「まあそうだ」=73.5%

《自分は子どもに必要とされている》

「とてもそう思う」「まあそうだ」=94.3%

と高く、父親の自己評価は高い。しかし、

【家事や育児に今まで以上に関わりたいですか】

はい：48.0%

いいえ・どちらともいえない：52.0%

と答えており、半数以上の父親のこれからの意欲は決して高くない。

また、先出の「兵庫レポート」のなかに母親への質問項目

《お父さんは育児に協力的ですか》

【4か月健診】=はい：78.3%

どちらともいえない・いいえ：21.0%

【3歳児健診】=はい：66.7%

どちらともいえない・いいえ：29.6%

《育児のことについて夫婦でよく話し合いますか》

【4か月健診】=はい：60.0%

ときどき・いいえ：39.1%

【3歳児健診】=はい：48.4%

ときどき：46.9%

この調査結果からは、父親は「自分の家事・育児への参加」の自己評価は高いが、母親の評価は決して高くない。特に、「24時間子どもと関わる生後4カ月の時期」に、父親が非協力的であると感じている母親の割合が2割と高いことは危惧する。ここから母親の疲労感が伝わってくる。また、子どもの年齢が上がるに従い「夫婦での話し合う」割合が減っていることも問題点である。3歳から「社会的躰」が始まり、「我が家の子どもはどのような大人になってほしいかを夫婦で話し合う時期」であり「父性」の登場時期である。

精神発達の視点でいえば、父親が本格的に登場する年齢は子どもが3歳以降である。

E. H. エリクソン（1902～1994）は精神社会的な発達段階を誕生から老年期までのライフサイクルを8段階に区切り、各々の段階での「発達課題」と「重要な関係範囲～あるいは集団～」を「ライフサイクルの漸成的図式」として表わしている。<sup>1)</sup>その中で、

0歳～6歳までの乳幼児期を3つに分けて、

I：0歳～1歳 乳児期

II：1歳～3歳 早期幼児期

III：3歳～6歳 幼児期

各々の段階のこころの発達に「重要な関係の範囲」として、

I：母性をもつ養育者との包まれる関係

II：母親（その役割をする人）との2者関係

III：母親（その役割をする人）・父親（その役割をする人）との3者関係《基本的家族》

と説明してⅢ段階での父親（父性）の役割の重要性を述べている。「子育ては母親に任せとけばよい」という風潮がある日本社会で、発達の視点から「子育てにおける父性」の重要性を広く認識し直す時代ではないかと考える。

### 3 事例：ここで事例をあげながらその実態を考えてみる

#### 3-1 ・身体的虐待に陥った母親の「語り」

A子は恋愛結婚をして待望の妊娠をし、育児休暇の後は保育所に預けて職場復帰を計画していたが、出産後「子育てすること」を不安に感じて虐待行為に陥った。その結果、わが子を夫に渡して離婚し、会社も退職している。

4年間にわたるカウンセリング場面での「語り」である。

（プライバシー保護のため、個人を特定できないように細部は変更してあります）

事例1：初回面接時30歳 学歴－短大卒 会社員

【面接1年目】

「今は新しい仕事を探しています。人前にでる仕事は苦手だから、事務の仕事がいいかなと思っています」と語る。

【子育てしているときの気持ち】

「私は昔から、他人に頼ってはいけなくて親に言われてきたので、子育ても自分でしなければと思い込んでいたのです。親にももっと頼ればよかったと今は思います」と語る。

《描画法である風景構成法を実施》

【風景構成法】：精神科医中井久夫が1969年に創案。

A4の画用紙にセラピストがフリーハンドで枠どりをしてから、「川・山・田・道・家・木・人・花・動物・石」と10個のアイテムを順に黒サインペンで書き入れていきひとつの風景を完成させるものである。描き終わったら、クレヨンで彩色、絵として完成させてもらう。<sup>2)3)</sup>

出来上がった作品はこの10個を適切に構成することができず、風景をなしていない。

「道」を横切る「川」：「川」に隣接する「田」「家」「花」「木」が並列に同じ大きさと描かれている。

「言葉」が出ない段階の乳幼児が表現する「泣き声」は「気持ちの表出」といえる。母親は「泣き声」と「場面での状況」を合わせて「泣き声の意味をとっさに推し量り、わが子の

要求を満たしていく。そこから母子の親密な信頼関係が始まり、愛着関係が作られていく」ことが育児であり「乳幼児期の子育ての母親の動きかた」であろう。多くの母親がこの行為を自然に行っているようにみえるゆえに、この行為が誰でも可能であるかのように思い勝ちである。

しかしながら、1つ1つの情報を全体として統合することが苦手なこの母親にとり、「言葉のない乳幼児」と毎日向き合うことは大変な精神的疲労であったろうと感じられた。そして、「理性」が「感情」に流されてしまう「こころの状態」も感じとれた。人の力を頼ってはいけなさと考えていたのであれば一層の疲労感と孤独感があり、こころの安定感はなかったであろうことが推測された。

この疲労感からの不安定さが「わが子を叩く」という行為に走らせたのではないかとの思いで話を聴いていった。

「わが子が可愛くない」と思っていた母親ではないが、「育てること」がとても苦痛に感じる母親がいる。

〈描画法であるバウムテストを実施〉

[バウムテスト]:「実のなる木」を画用紙(普通はA4)に鉛筆で描いてもらう。心理テストとして用いるための考えかたを1949年にコッホが著している。

A4の画用紙に大きく描かれた木。枝ぶり・実の成り具合など、ほとんど左右対称に描かれている。枝は最初から左右対称ではなく、あとで付け足して左右対称にしている。根はなく地面は描かれない。

左右の対称性からは生真面目さ、几帳面さを、根のなさは精神的に安定感のない状態を感じとれる。また、思考の固さというか、かたくなさを感じとれたバウムテストである。

[面接2年目]

「資格をとるための勉強をしています。人を世話することをしてみたいです。わが子はできませんでしたが、他人の世話はできるかもしれません。頑張ります。」

他人の世話をすることで、自分のできなかった行為の代償としての職業選択とも読み取れる言葉である。

【子育て中にして欲しかったこと】

「今は嫌なことがあると、親やカウンセリング場面で嫌な気持ちを話すことにしています。親も娘の私が育児放棄をしたことで自分自身を責めていて、今は「つらいことや嫌なことがあったら自分で抱えていないで話さない。子育てをもっと手伝ってやればよかったと後悔している」と言ってくれます。私が子育てをしているときに、この言葉を言ってくれたら頼れたのですが、母親はその時は言ってくれませんでした。私は全部自分でやらなくてはという思い

が強かったのです」と語る。

【以前の職場環境について】

「実は妊娠して産休に入るときは嬉しかった。職場環境は年々厳しくなっていました。部署ごとのミーティングが月1回あり、そこで自分の意見を発表しなければいけないのですが、それがとても苦手でした。また、産休明けは部署が変わることになっていて、そこで新しい人間関係を作っていかなければと思うと憂鬱でした。妊娠したときに退職することも考えたのですが、子どもにもお金がかかることを考えたら無理だと思い諦めました。夫も育児に協力してくれると伝えてくれていたので何とかできるかなと思いました」と語る。

【子育てしているときの気持ち・夫のこと】

「私は1歳までわが子と生活したのですが、可愛いとは思いますが、心からの愛情が湧かなかった。何故か?と今でも考えるのですが、《とにかく子育てがしんどくて》としかわかりません。しんどくて、そこから逃げたくて叩いてしまったのかもしれませんが。でも今でもわかりません。子どもの泣き声はたまらなく嫌でした。泣き声をきくと育児放棄をしたくなりました。子どもの存在が自分を束縛してくるようにも思いました。私は子どもを育てる力がないのかもしれませんが。

出産後、夫は約束とは違い育児には協力してくれませんでした。頼みましたが、夫は怒るだけで変わりませんでした。つらかったです。そのつらさを親には言えませんでした。経済的なことを考えると、私は働かなければいけないし、子育てはこれからも私が一人でしなくてはと思うとつらかったですし、自信もなくなりました。

育児と仕事の両立は私には無理かと悩みました」と語る。

[面接3年目]

「人の世話の仕事は楽しいです。職場の人間関係もまあまあです。これからも頑張りたいです」

職場での人を世話して感謝されて頼られているという実感は彼女にとって嬉しいことのようにであった。

【子育てについて】

「わが子の世話は一日中一緒にいなくてはならないですが、仕事としての世話は仕事の時間として割り切っているし、仕事が終われば自分の時間です。それに、今世話している人は《話すこと》ができるので、何をどうすればよいか?ということがわかりやすいです。だから楽です。

私がわが子を殴っていたときには、もしかしたら《この子がいなくなったら、私は楽になる》という気持ちがあったかもしれませんが。子どもと離れることもできず、あの頃の私は正常な判断力がなかったです。

それに、私はストレスが溜まると、回りの人にあたって

しまう性格です。子育てしているときは周りには「わが子」しかいなかった。夫も親もそのときは助けてもらえる相手ではありませんでした。今の親は私の相談相手です。あの時はやり切れない気持ちを【わが子に殴る】という行為で発散してしまったのです。かわいそうなことをしました」と語る。

[面接4年目] 終了

「仕事はつらいこともありますが、まあ楽しいです」

【子育てについて】

「他人の子どもやペットは可愛いと思います。ペットの死に涙がでました。しかし、わが子は簡単に可愛いと思えません。頼りにしていた夫は私の味方になってくれませんでしたから、自分ひとりで育てていかなければと思っていました。親にはわが子を大人にさせるという大きな責任がありますから、緊張しますし不安にもなりました。

産休明けが近づくと仕事復帰も不安でした。育児と仕事の両立は私には無理ではないか思い始めました。

私は1つのことをしていると他のことを同時にできないのです。24時間の育児はいつも何かしていなくてはいけません。でも、何かしていけばよいかかわからずとてもつらかったです。パニック状態でした。それに仕事に加わると思うと不安感でいっぱいになりました。

私は「子育て」ができない人だと今は思います。二度と「子育て」はしません。子どもを産みません。「人の世話をするという仕事」は続けていきます。楽しいですから」と語る。

4年間にわたり、「わが子を育てることの苦悩」を語ってくれた「語り」は、「わが子ゆえの子育てのつらさ・不安感」を伝えてくれている。

「面接の後半に再度描いてもらったバウムテストは、まず葉っぱが大きく書かれ、次に幹が下から上に。さらに上方に付け加えられた幹、枝、実が順に描かれた。最後に下の幹から新しい枝が2本描かれた。この2本の枝は彼女の新しい生き方のように思えて嬉しく感じた」

「養育する力が弱い母親」も非難されることなく、出産したわが子を養育放棄しないで子育てできるようにすることが「真の子育て支援」と筆者は考える。そのために「母親は子育てするのが当たり前・子育てする力が備わっている」という考えではなく、母親が「わが子」を育てるときの複雑な心理を理解して、一人一人の母親が望む支援をすることがまず必要である。

### 3-2 ネグレクトを疑われた母親の「語り」

保健所での1歳6カ月児健診時に長男の「言葉の遅れ」を指摘された母親が、保健所が行っている「親子で遊ぶ教室」に参加した後で相談員に「子育てをする体験をとおして気づいた自分の内面」を語った。(プライバシー保護のため、個人を特定できないように詳細は変更してあります)

事例2：35歳 結婚と同時に退職し専業主婦

おしゃれで細身の体型

「私は独身の頃から子どもが苦手でした。むしろ嫌いでした。友人に子どもができる、子どもの話題がでるのが嫌で付き合いを辞めてしまう程でした。

主人とは職場で知り合いました。妊娠したときは正直悩みました。誰にも言わずに1週間ほどは墮胎することばかり考えていました。けれども、夫は長男なので跡取りが必要かと思い、出産を決意しました。けれども、だんだんお腹が大きくなり、夫の何気ない『太ったな。一緒に歩くのは恥ずかしいな』等の言葉にイライラして、妊娠を後悔しました。

生まれたのは男の子だったので、これでもう子どもを生まなくてもいい、とまず思いました。よく、子どもが嫌いな人でも、自分の子どもは可愛いとききますが、私はやはり子どもが可愛いと思えませんでした。

とりあえず犬を世話するように育てました。生後6カ月ほどから、子どもを一人家に置いて外出したりしました。子どもと2人でいる時間が耐えられなかったのです。

イライラすると子どもを叩いたりすることもありました。

子どもの1歳6カ月児健診の時に『言葉が少し遅いですね』といわれたとき、原因は私にあると思いました。

私は、それまでテレビやビデオばかり見せ、話しかけたり遊んだりすることはほとんどしませんでした。可愛いと思えない子どもに何を喋りかければよいかかわからなかったのです。子どもの【身体の世界】はしたけども、【こころの世界】はしていませんでした。

言葉が出れば少しは可愛くなるかと思い、誘われた「親子で遊ぶ教室」に参加してみることにしました。そこで「母親の表情は子どもの行動決定に関係する」という講話を聞いて目からうろこでした。私はいつも無表情でしたから。そして「母親は子育てにイライラするよ。多くの母親が子育てに悩んでいるよ」というスタッフの言葉で私の目の前が明るくなりました。私は周りの母親はみんな完璧に育児をしていると思い込んでいました。完璧にできない自分にイライラもしていました。それからはすこし自分自身にゆとりを感じました。

教室で習った遊びを自宅でも子どもとやってみました。

私は子どもの頃に親からよく殴られました。些細なこと

で両親は感情的になり私を殴りました。小学生の頃にも真冬にベランダに下着のまま放り出されたことを思い出しました。自分の育てられかたが、やはり子どもの育て方にも関係するのですね。自分の育った家のやりかたは、それが少しおかしいと思ってもそんなものかと思って疑問に感じませんでした。〈親は育てられたやりかたで、わが子を育ててしまいがちである〉という講話を聞いてハットしました。おかしいやり方は繰り返してはだめなんですね。子どもに手を上げそうになりますが、我慢しています。最近、この教室のことを話題にして夫と話すようになりました。子どもの将来のこと、遊び方、躰のしかた等話します。夫婦の会話が増えました。最近はおふと子どもを生んで良かったと思います。不思議ですね]

#### 4 母親にとっての「子育て支援」とは

望んだ妊娠であろうと、なかりと約40週という期間を自分の体内で育てて出産して「子どもの母親になる」という経過はいつの時代も変わらない。育てる適切な環境が確保されるならば、出産時に母親は自分の体内から産み出されたわが子の顔を見て「この子を育てていこう」という気持ちになり、多くの母親はその気持ちが継続していく。しかし、その気持ちが途中で切れてしまう母親がいる。そのような母親によって起きる子どもへの事件が「虐待事件」や「虐待通告される相談数の増加」として報道されて、「最近の母親は養育する力が弱い」「自分勝手な母親が多くなった」等と非難されがちである。

このような報道や非難は「今子育てしている母親」に「自分の養育は周りの人から虐待をしている母親と見られていないだろうか?」という不安感を与えている。

臨床心理士として「子育て相談」をしていると、最近の母親は「非常に慎重で、過敏過ぎるほどに子どもとの関係に緊張感をもっている」と感じる。

ウィニコット<sup>10)</sup>は「母親が乳児にできることは、初めは感受性豊かにほどよくあること、現実の女性が幼児にできることはたかだかそのくらいです」と「自然な」母親と彼女が「自然に」行う事柄の重要性を述べている。

人間の子どもは約1年間歩行できず、また周囲の大人の世話なしには生きてさえいけない存在である。そのような無力の幼児を多くは出産した母親が毎日世話をする。

当然、世話をする力を「たくさん持っている母親」も、「乏しい母親」もいる。「子育て支援」は「たくさん持っている母親」にも必要であるが、「乏しい母親」にはきめ細かく、かつ多くの支援が必要である。特に「自律に向かっていく

段階以前」の0歳～18ヶ月程度までは「養育者への依存度」が高く、子どもへの影響も大きい。夫や両親の協力と行政側の支援は不可欠であり、その際には「わが子を養育する母親の心理」を理解することと、「世話する力の乏しい母親」への「暖かいまなざし」が必要である。

「わが子を養育する力の乏しい母親」を周りが支援できなかった事例1は、「他人の世話をする力とわが子を世話する力は異なる」ことを示唆している。「わが子の養育」故の心理から「育児不安」が生じて苦しみ孤立し、さらに乏しい養育環境が絡んで虐待行為に及んでしまった母親である。女性が「家事・仕事・育児」のバランスをとりながら、両立していくことは「強い体力と心のエネルギー」さらに「強い養育する力」が必要であり、この母親は自分の力量を超えたことを自分だけで行おうとして「わが子」を養育する機会を失った。「母親一人に子育てを任せない」これは基本であり、全ての母親にあてはまる今後の「子育て支援」の根幹であると考えられる。

また、たとえ母親自身が虐待された経験を持ち、「子育てを放棄していた母親」<sup>9)</sup>も子どもが乳幼児期に「心理教育」を受けることで「自分のこころの問題」と向き合い、気づくことで「ほどよい母親」になれることを事例2は教えてくれる。しかし、そこには夫の協力が重要であることも明確に示唆している。

出産した全ての母親が精神的安定感をもってわが子を養育できるようにしていくには、どの様な取り組みが必要であるかがこれからの「子育て支援の方向性」であり、「少子化対策」でもあると考える。

#### 参考文献

- 1) 前田重治：続 図説 臨床精神分析学，誠信書房 1994
- 2) 山中康裕：心理臨床と表現療法，金剛出版 1999
- 3) 山中康裕・山下一夫編：臨床心理テスト入門 東山書房 1988
- 4) 原田正文：子育ての変貌と次世代育成支援～兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防～ 名古屋大学出版会 2006
- 5) 厚生労働省：平成19年度社会福祉行政業務（福祉行政報告例）結果の概要
- 6) 平成19年度男女共同参画社会に関する世論調査（内閣府）
- 7) 総務省統計局「労働力調査」平成19年
- 8) ベネッセ次世代育成研究所「乳幼児の父親についての調査」 発行日：2006年1月31日
- 9) 渡辺久子：母子臨床と世代間伝達，金剛出版。2000
- 10) 妙木浩之編：ウィニコットの世界「現代のエスプリ」 別冊 至文堂 2004